

体色によって生息環境を選ぶウスバカマキリ(カマキリ科)

下野谷 豊 一*

ウスバカマキリ *Mantis religiosa* Linnaeus には、体色が緑色と褐色の2型が知られている。生息環境が大型河川の氾濫原のような、陽当たりの良い草地に限られるためか、福井県内からの分布記録は少ない。福井県昆虫目録(第2版)にも最近の記録はない。

1997年9月30日、吉田郡松岡町下合月の九頭竜川右岸の河川敷で、昆虫類全般の調査を行った際、本種を多数確認した。調査にはネットによるスリーピングとビーティングによる採集を行ったが、その際、次のような興味ある観察をした。

河川敷の砂地の部分にはカワラヨモギなどの草地が広がっており、その中に低木が点在する。低木のあたりでビーティングネットに落ちてくるのは、すべて緑色型のものばかりで、偶然かもしれないが褐色型は1頭も見られなかった。一方、玉石で覆われた裸地状のところには、小さな白い花を沢山つけたカワラハハコグサの群落があり、その花のあたりを掬うとハチ、アブ類に混じってウスバカマキリの褐色型が入っていた。そこで、付近のカワラハハコグサの株に近づいてみると、花の上で獲物を待ち伏せしているウスバカマキリの姿があった。透けたような褐色の体は、中央が褐色の白い花にうまく溶け込んでいて、蘭の花に擬態することで知られる、熱帯アジアのハナビラカマキリを連想させるものであった。さらに、そのまわりを探してみると、10m四方ほどの群落で花や葉上に点々ととまっている8頭を確認した。全て褐色型で、何れも単独でとまっていた。これはウスバカマキリが自分の体色を認識できることを示しており、体色によって天敵に対する防御効果や、捕食するのにより有利な生息環境を選んでいるのであろう。

この日、観察したり採集した個体の体色による比率は次のようである。緑色型5頭(1♂, 1♀採集)、褐色型14頭(2♂, 3♀採集)で、従来、褐色型は少ないように言われているが、この結果では逆転している。この程度の観察数や、1回の調査結果だけで両型の比率を論ずるのは無理であろうが、上述のように、それぞれの型が生息環境を選んでいることは確かである。本種の生息する河川敷のような環境では、洪水など異常な出水による環境の変化があるのは常で、両型が選ぶ生息環境の広がり方も当然変化する。従って、両型の比率は生息環境の増減によって変動することが予想される。

ここで、ウスバカマキリに緑色、褐色の2型がある意味について考えてみたい。上流に設置されたダムや改修により、大きな洪水はほとんど無くなったが、本来、河川敷の環境は洪水などの影響で常に変化しており、このような不安定な環境の中での種の存続をするためには、どちらの型に有利な環境になっても生き残れるように対応した結果が、2型を生じさせた要因でなかろうか。

*〒910-0004 福井市宝永3-31-12

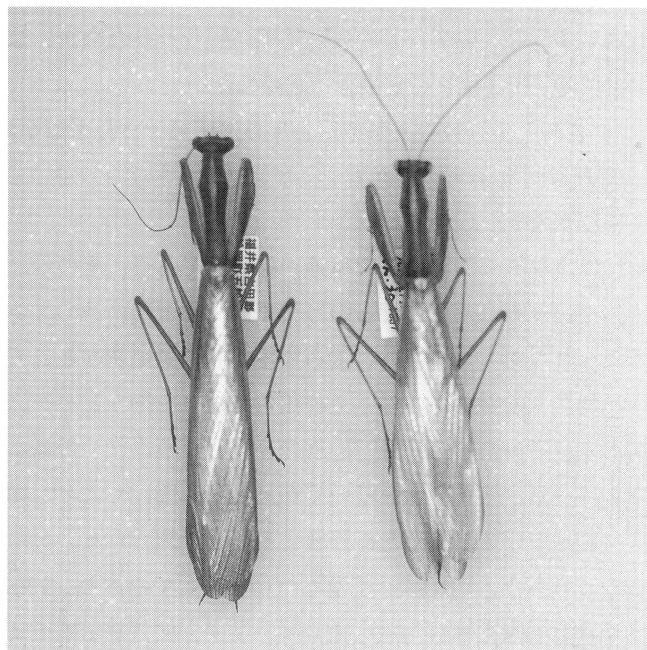
下野谷 豊 一

参 考 文 献

安松京三ほか（1965）原色昆虫大図鑑 第3巻 北隆館

伊藤修四郎ほか（1977）原色日本昆虫図鑑（下）保育社

酒井哲也ほか（1998）福井県昆虫目録 第2版 福井県県民生活部自然保護



ウスバカマキリ

左一褐色型 右一緑色型